

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530947

研究課題名（和文）PISA読解力と全国学力・学習状況調査に関わる国語学力の形成についての臨床的研究

研究課題名（英文）Practical Research on the development of Japanese language skills concerned with PISA and the national achievement test

研究代表者

阿部 昇（ABE NOBORU）

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号 80323129

研究成果の概要（和文）：PISA読解力と全国学力・学習状況調査「国語B」中の文章・作品を吟味（評価・批判・批評）する力に関わる要素について分析・検討を行った。それによって二調査の前提となっている国語（言語）学力観を解明した。また二調査で好結果を残した国（フィンランド等）や地域（秋田県、福井県等）の授業や教育状況を調査した。それによりそれらの語（言語）学力形成でポイントとなる要素を抽出した。上記を通じて、文章・作品を吟味（評価・批判・批評）する力に関する国語科教育の教科内容と教育方法を新たに構築した。

研究成果の概要（英文）：I analyzed the element of critical reading literacy concerned with PISA and the national achievement test. Then I elucidated on Japanese language skills that became the premise of PISA and the national achievement test. In addition, I investigated classes and education situation of some foreign countries (Finland, etc.) and some prefectures in Japan (Akita, Fukui, etc.) that produce a good result in the two assessments. I thereby extracted the elements of language skills development. Through the above, I proposed the subject contents and the education methods of critical reading literacy in Japanese language education.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：PISA読解力、全国学力・学習状況調査、活用型学力、吟味、評価、批判、批評、教科内容、教育方法

1. 研究開始当初の背景

平成12年(2000年)から始まったPISA「読解力」、平成19年(2007年)から始まった全国学力・学習調査「国語B」を分析すると、21世紀を生きる子どもたちに必須と思われる要素がその中に多く含まれる。文章・作品の表層を理解だけでなく、記述を根拠として推論することを求める問題や、メタ的に文章・作品の構造を把握することを求める問題、複数の文章・作品を比較・検討しながら吟味(評価・批判・批評)することを求める問題が多くあった。国際的にも日本でも、学力に対する積極的な見直しが進みつつあることが伺える。

ただし、PISA「読解力」「国語B」にはまだ不十分な点もある。文章の一語一文にこだわらせつつ、吟味(評価・批判・批評)するという観点が多分には徹底しきれていない。どちらに賛成するかを示し、その根拠を述べることまではさせるのだが、賛成できない点についての批判、不十分と考えられる点についての批判をさせることはない。また、文学作品についても、作品のプロットの仕掛けや仕組み、そしてレトリックと関わらせながら批評させるというレベルにまでは至っていない。

以上のような吟味(評価・批判・批評)に関する研究は、国語科教育の学会でも、教育方法の学会でも、まだ十分ではない。PISAや全国学力・学習状況調査についての研究は増えてきているが、吟味(評価・批判・批評)に関わる教科内容研究・教育方法研究に結び付いているものは少ない。

それら学力についての解明(教科内容解明)とその教育方法についての解明を急ぐ必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、はじめにPISA「読解力」及び全国学力・学習状況調査「国語B」の前提となっている国語(言語)学力観を分析・検討する。特に文章を吟味(評価・批判)する力、また文学作品を吟味(評価・批評)する力に関する要素を重視する。それらを検討しつつ、文章・作品の吟味に関する「教科内容」と「教育方法」を構築・解明することが本研究の目的である。そしてそれら「教科内容」「教育方法」を、全国の小中高の授業実践により検証していく。

本研究では、以下の4点について解明を行う。

- (1) PISA「読解力」問題及び全国学力・学習状況調査「国語B」問題の分析・検討を行い、それらの前提となっている国語(言語)学力観を解明する。特に文章を吟味(評価・批判)する力、文学作品を吟味(評価・批評)する力についての解明を重視する。その先進性と限界を具体的に解明し、下記(3)の研究につなげる。
- (2) PISA「読解力」及び全国学力・学習状況調査「国語B」で好結果を残している国・地域を調査し、その要因を解明する。特に「吟味力」にかかわる「教科内容」「教育方法」に着目する。PISA「読解力」についてはフィンランド・韓国、全国学力・学習状況調査については秋田県・福井県を対象とする。(これらの国・地域は1位・2位。)
- (3) 上記(1)(2)を生かしつつ、文章を吟味(評価・批判)する力、作品を吟味(評価・批評)する力に関して、「教科内容」「教育方法」を構築・解明する。「教科内容」については、小学校→中学校→高等学校の12年間を系統的に構築する。「教

育方法」については、子どもたちの発達段階に即した授業方法の解明、教材開発等を行う。そして、それらにもとづき、吟味（評価・批判・批評）する力を育てる国語の授業を全国の小中高の教師に実践してもらい、それらの有効性について臨床的に検証していく。

(4) 吟味に関わる国語学力の調査方法について、問題・設問、採点方法、データ分析方法等の観点から解明していく。

3. 研究の方法

(1) PISA「読解力」及び「国語B」の分析・検討から始める。PISA「読解力」についてはOECDの「キー・コンピテンシー」の検討、「国語B」については都道府県の検証改善委員会の検討を参照する。

(2) その上で吟味（評価・批判・批評）する力に関する「教科内容」の系統化、「教育方法」の解明を進める。同時に全国の小学校でそれを実践し検証してもらう。

(3) OECDのPISA「読解力」問題及び全国学力・学習状況調査「国語B」問題の分析・検討から始める。問題・設問の詳細な分析・検討、また結果についての分析・検討を行う。また、後者については、秋田県、福井県のみならず、多くの都道府県の検証改善委員会の報告書を検討していく。特に、それぞれの好結果の要因分析を行う。

(4) 文章の吟味（評価・批判）に関する教科内容・教育方法について、中学校3年～高等学校から研究を進める。「教科内容」の構築、授業方法の解明・教材の開発等（教育方法）を行う。作品の吟味（評価・批評）についての教科内容・教育方法に関しては、小学校高学年から始める。

(5) 全国の小学校で上記の構築・解明の成果を実践し検証してもらい、ビデオに撮影していく。ビデオカメラを複数持参し、複数

箇所から授業を撮影する。そして、単元の目標、当該授業の「ねらい」（以上、教科内容）、教材選択、教材研究、指導過程、授業における発問・助言等、学習集団指導（以上、教育方法）などについて多角的に検討を行う。

(6) 上記の体系化・開発をさらに進めつつ、PISA「読解力」及び「国語B」の分析・検討と、お茶の水女子大学COE国語学力調査「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」の国語学力調査の結果（阿部が中心となってまとめた『JELS第2集・国語学力調査報告』2004）等とのつぎ合わせを行う。

(7) フィンランドの小中学校、大学等を訪問し好結果の要因を調査する。「教科内容」「教育方法」を中心とした調査である。吟味のための方法・技能をどのように子どもたちに学ばせているかを具体的に調査する。同時に教師教育、教師の研修システムについても調査する。

(8) 文章を吟味（評価・批判）する力に関して「教科内容」の系統化、「教育方法」の解明をほぼ完成する。また作品を吟味（評価・批評）力に関する「教科内容」「教育方法」の研究を中学校・高等学校に進める。

4. 研究成果

(1) OECDのPISA「読解力」および全国学力・学習状況調査「国語B」の問題文・設問、採点基準等の分析・検討を行い、そこに含まれる言語（国語）学力観について解明を試みた。その際に、お茶の水女子大学大学院COE「青少年期からの成人期への移行についての追跡的研究」の国語学力調査（阿部がその責任者をつとめた）と比較・検討を行った。それにより、構造的・文脈的に文章を把握する力、ロジック・レトリックをメタ

的に把握する力、批判的・評価的に文章を把握する力、それらにかかわり証拠を上ながら論理的・説得的に表現する力などが、重要な要素として抽出できた。ただし、PISA及び全国学力・学習状況調査「B問題」の両者について問題・設問上の課題があることも確認できた。

(2) 阿部は秋田県検証改善委員会委員長であるが、秋田県検証改善委員会で全国学力・学習状況調査の秋田県の結果について、秋田大学教員、秋田県教育委員会指導主事と共同で分析・検討を行った。教科の設問別の検討だけでなく、学校質問紙・児童質問紙・生徒質問紙の検討も詳細に行った。また、秋田県内の小学校・中学校を訪問しての事例調査も実施し、その結果と上記の検討とをクロスさせていった。その検討結果は、『学校改善支援プラン』（平成22年度版・平成23年度版・平成24年度版）にまとめた。そこには教師（集団）の授業力、特に探求型・試行錯誤型の授業を学習集団を生かしながら展開する力が、大きく関わることが見えてきた。その前提として、教師集団の研究（研修）の在り方（質やシステム）が必須であることもわかってきた。また、教育行政と学校、学校内での管理職と教師集団の関係、教師集団の相互連携の重要性も明らかになった。さらに学校—家庭—地域の連携、家庭学習指導の重要性なども見えてきている。

(3) 文部科学省委託研究「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」を、早稲田大学および福井大学の教員と行い、全国学力・学習状況調査の秋田県と福井県の特徴の比較・検討を行った。（その検討結果は、『文部科学省委託研究報告書』にまとめられた。）これ

らの検討と関わらせながら、PISAおよび全国学力・学習状況調査「国語B」の前提となる国語学力観の検討を進めた。前記(2)の考察がこれらの調査によってさらに証明された。

(4) 阿部は、日本NIE学会と日本新聞協会との共同プロジェクト「情報読解力育成するNIEの教育的効果に関する実験・実証的研究」の国語部会の責任者をつとめている。そのプロジェクトを通じて、PISA「読解力」に対応するNIE (Newspaper in Education) 授業モデルを提示し、全国の小中高の教師に実践してもらった。その研究成果をPISA「読解力」および全国学力・学習状況調査「国語B」の学力観（言語観）の検討に生かすことができた。また、新聞を使うことで、文章の吟味（評価・批判）力を子どもたちに身につけさせることが可能となることを実証できた。

(5) 福井県教育委員会教育庁義務教育課長から聞き取りを行い、秋田県と福井県の教育状況・教育施策の比較研究を行った。また、フィンランドを訪問し、ヘルシンキ大学附属学校、ユバスキュラ大学附属学校、ヘルシンキ近郊の公立学校の授業を視察した。また、ヘルシンキ大学教授ヤリ・ラボネン教授、ユバスキュラ大学教授ティーナ・シランデル教授他とPISA「読解力」に関わる学力観についての情報交換を行った。それらを通して、フィンランドがPISAで好結果を残している要因を探った。(2)で考察した内容がかなりの程度フィンランドの教育の先進性と重なることが確認できた。

(6) 上記研究成果を生かしながら、PISA「読解力」および全国学力・学習状況調査「B問題」にかかわる文章の吟味

(評価・批判)の「教科内容」「教育方法」の解明を。小学校高学年から中学校～高等学校段階について進めた。2008年・2009年の学習指導要領「国語」でも一定の前進が見られているが、またその教科内容やそれらの系統性に改善すべき部分が多く残っている。また「要領」である以上抽象的になることは避けられない。そこで、吟味(評価・批判)にかかわる様々な教科内容論(提案)や教育方法論(提案)・教育実践を検討しながら、一定の体系・系統を構築することができた。

(7) 秋田大学教育文化学部附属小学校・附属中学校、秋田県、茨城県、千葉県、埼玉県、新潟県、京都府、熊本県等の公立・私立の小学校・中学校の教員に文章の吟味(評価・批判)を重視した授業を実践してもらい、上記(6)の有効性について検証することができた。また、それらの実践にかかわる情報交換の中で上記(1)や(2)の考察が裏付けられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

- ① 阿部 昇、「自分の考え」を鍛える論争読みのススメ、国語教育 No.747~752、査読無、2012、各118-121(計24頁)
- ② 阿部 昇、「伝え合い」の授業こそが質の高い国語力を身につける、言語技術教育研究第3巻、査読無、2012、14-19
- ③ 阿部 昇、その単元・その教材で身につけさせるべき国語の力が明確になってきている、言語技術教育 21、査読無、2012、40-43
- ④ 阿部 昇、戦後国語教育における説明的文章の批判的読解に関する考察—その2、研究紀要13(科学的「読み」の授業研究会)、査読無、2011、19-29
- ⑤ 阿部 昇、「思考力・判断力・表現力」と「評価」する力「比べる」力、国語教育 No.731、査読無、2010、44-46
- ⑥ 阿部 昇、戦後国語教育における説明的

文章の批判的読解に関する考察—その1、研究紀要12(科学的「読み」の授業研究会)、査読無、2010、11-21

- ⑦ 阿部 昇、国語学力調査の成果と課題—PISA「読解力」全国学力・学習状況調査 お茶の水女子大学COE国語学力調査から見えてくるもの—、国語学力調査の意義と課題(全国大学国語急行く学会)、査読無、2010、132-143

[学会発表](計6件)

- ① 阿部 昇、NIEはPISA型読解力の形成に大きな力を発揮できる、日本NIE学会・日本新聞協会 NIE共同研究セミナー提案、2012.3.10、日本新聞博物館
- ② 阿部 昇、「言語活動」は内言の外言化という提案性をもつ、筑波大学附属小学校・初等教育研究会パネルディスカッション提案、2012.2.16、筑波大学附属小学校
- ③ 阿部 昇、「構造的把握」「メタ認識」「評価・吟味」の力を育てるNIE国語の授業、日本NIE学会課題研究提案、2011.11.26、鳴門教育大学
- ④ 阿部 昇、全国学力・学習状況調査 秋田県の結果から日本の教育に提起できること、日本教育方法学会(秋田大会)パネルディスカッション提案、2011.10.1、秋田大学
- ⑤ 阿部 昇、NIEは主体的な「読解力」を育てる、NIE全国大会(青森大会)、パネルディスカッション提案、2011.7.25、青森市文化会館
- ⑥ 阿部 昇、思考力・判断力、表現力にかかわる評価の在り方と授業改善、日本教育方法学会(東京大会)、2010.10.10、国士舘大学

[図書](計6件)

- ① 阿部 昇(編著)、学文社、「言語活動」を生かして確かな「国語の力」を身につけさせる、2012、総頁188、分担6-17
- ② 田中博之、阿部 昇、他、文部科学省委託研究報告書・学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 全国学力・学習状況調査において良好な結果を示した教育委員会・学校等に関する教育施策・教育指導等の特徴に関する調査研究、総頁126、分担62-73
- ③ 阿部 昇(編著)、学文社新学習指導要領・新しい教科書の新しい教材を生かして思考力・判断力・表現力を身につけさせる、2011、総頁188、分担6-13
- ④ 小原友行、阿部 昇、他、日本NIE学会・日本新聞協会、情報読解力を育成するNIEの教育的効果に関する実験・実

証的研究、総頁 261、分担 9-16、99-104

- ⑤ 阿部 昇 (編著)、学文社、国語科教科内容の系統性はなぜ 100 年間解明できなかったのか、2010、総頁 187、分担 6-17、34-41
- ⑥ 阿部 昇・秋田大学教育文化学部附属小学校 (編著)、一莖書房、授業改革への挑戦—新学習指導要領を見通した新子井提案・国語編、2012、総頁 211、分担 8-19、150-163

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 昇 (ABE NOBORU)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：80323129